

第15回全日本実業団女子・高壮年剣道大会

平成24年2月19日(日) 日本武道館
主催◆全日本実業団剣道連盟
撮影◆窪田正仁

女子部

吹いた。パナソニック旋風！ 東西対決を 西が制して初優勝



チーム	先	中	大	得点
パナソニック (ES本社)	藤山	大道	平山	2
パナソニック (ES東京本社)	山野井	金丸	橋本	1

決勝【大将】

平山(パナソニックES本社)◎コー 橋本(パナソニックES東京本社)

▲五分で迎えた大将戦。跳び込みメンから構えなおすや平山がすぐさまにコテに出れば、これが橋本の出ばなに決まる(写真)。その後も相手の出ばなにきわどいメンを打つなどした平山が、最後は橋本の出ばなに再びコテを決めた



優勝◆パナソニック (ES本社)

平山友香、大道美幸、藤山枝里佳、田中菜都美。監督=酒井順也

今年、合併によって「パナソニック」から社名変更をした「パナソニックES」が、その初陣となる本大会で華しいデビューを飾った。

旧パナソニック電工は昨年、一昨年、2年続けて2位に入っていた。昨年のメンバーである藤山と平山は、今回大車輪の活躍を見せた。とくに平山は前回、決勝で敗れたことによってチームの負けも決まっていただけに、雪辱の思いは強かったであろう。今回の決勝戦では、それを取り返すかのような二本勝ちを収めた。

2位のES東京本社は、前回3位になった「パナソニック電工東京本社」のメンバー2名が前衛を固めてリードを奪い、大将の橋本も準決勝で勝利を収める。決勝戦は、パナソニックESの東西対決となったが、西であるES本社が競り合いを制している。

「今回の結果はすなおに喜びたいと思います。前日のアップ時から「気迫で絶対相手に上回れ」と言い続けてきました」と酒井順也監督は語った。

代表戦が頻発した本大会だったが、試合当日「団体戦が始まる前に代表戦に出る選手を届け出るように」という通達があった。が、とくに序盤はこれが徹底されていなかったようで、「うちの選手が揭示されたから相手側は選手を申告しているようだった」という声があった。実業団剣士にとっては年に一度の「全国大会」である。変則的なルールだからこそ、徹底がなされるべきであったはずだが。

3回戦【代表】
中島(朝日新聞姫路販売)△メー 飯田(NTT東日本東京支社)

▲3試合連続引き分けて、勝負は大将同士による代表戦に持ち込まれる。NTTからは、学生時代の実績も豊富な飯田が立ち上がった。臆せず攻め込んだ中島が立ち上がり早々にメンを決めた(写真)



2位◆パナソニック (ES東京本社)
橋本麻紀、金丸真利、山野井友里、田代文子。監督=安井克己



3位◆日本耐酸塩
高木里奈、伊藤聖彰、上村美央、加藤詩野。監督=須藤禎尚



3位◆パナソニック電工SUNX A
西口真以、鈴木紗知、福富静香、因幡亜子。監督=川野裕司



準決勝【先鋒】

藤山(パナソニックES本社)◎メー 上村(日本耐酸塩)

▲立ち上がるやいきなり藤山がメンに跳び込み、これを鮮やかに決める(写真)。ほどなくして藤山がメンを追加し快勝。大将戦ではパナソニックの平山が跳び込みゴテと跳び込みメンを連取した

準決勝【大将】

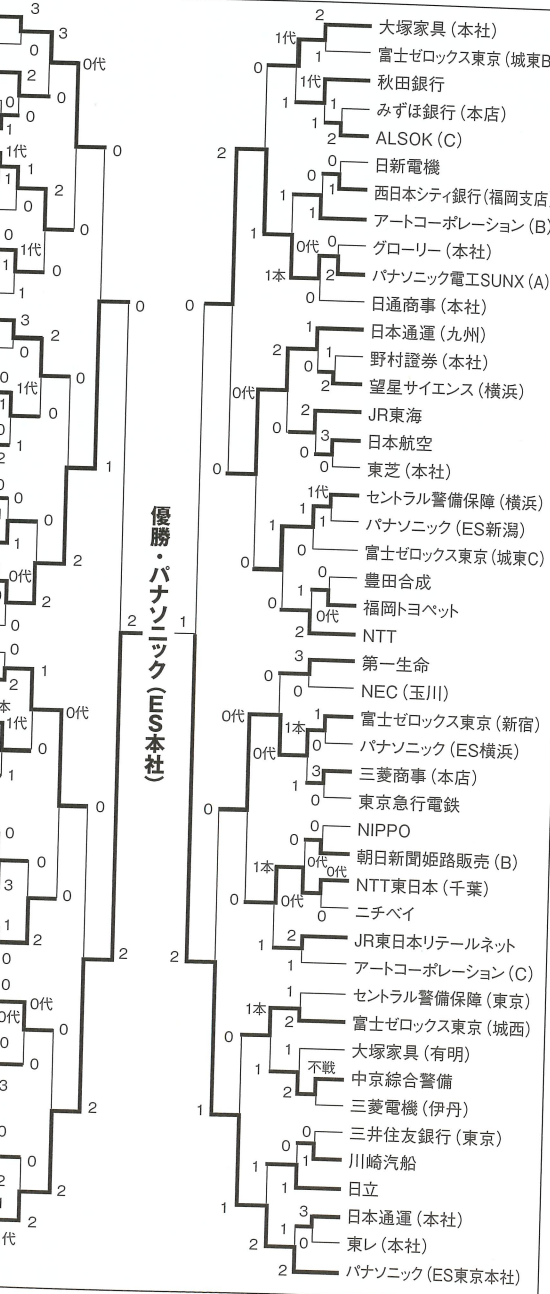
橋本(パナソニックES東京本社)◎西口(パナソニック電工SUNX A)

▲中堅・金丸が一本勝ちしてパナソニックESがリード。追う立場の西口が立ち上がりからメンなどで攻めるも、終盤に橋本が大きく跳び込みメンを決め(写真)、そのまま一本勝ちを収めた

2回戦【代表】

平山(パナソニックES東京本社)コー 柴山(三井住友海上)

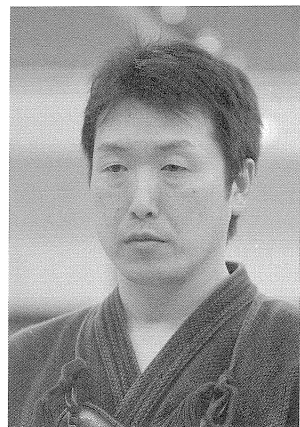
▲1-1の同点となり、パナソニックからは大将の平山が、三井住友海上からは中堅の柴山が登場。序盤から果敢な打ち合いが展開されたが、最後は平山が攻め込んでからのコテを決めて決着(写真)



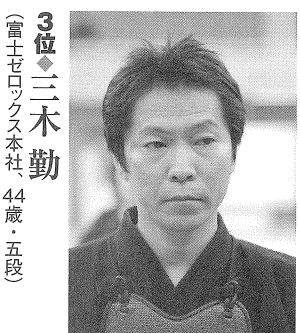
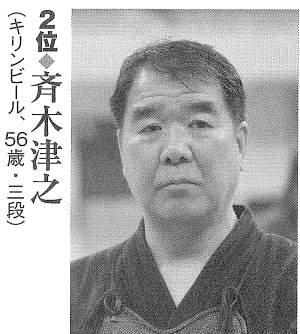
大会レポート 全日本実業団女子・高壮年



大会のダイジェスト映像を「剣道ナビ」にて見ることが出来ます。剣道ナビについては169ページをご参照ください。



優勝◆松崎安利
(東京システム運輸、42歳・四段)



決勝
松崎 (東京システム運輸) M- 斉木 (キリンビール)
▲音木がメン抜き、さらには左にさばきながらのメン返しドウを何度か放ったが、旗は上がらなかった。時間内に旗が本上がるコテを打った松崎が、最後は延長でメンに跳ぶ。音木はドウに反応しようとしたが及ばなかった(写真)



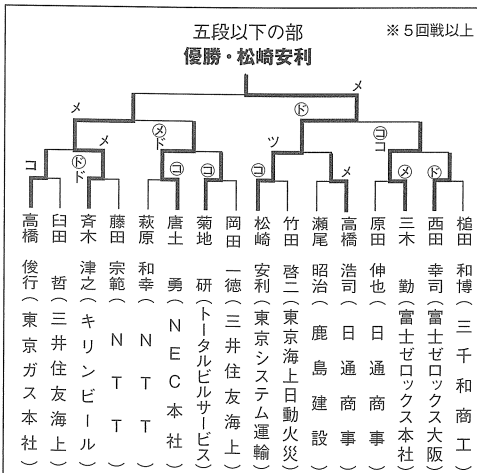
準決勝
斉木 (キリンビール) M- 唐土 (NEC三田)
▲立ち上がりから唐土が攻め立てたが、延長にはいると互角の展開となり、最後は斉木が唐土を引き出してからのメンを鮮やかに決めた(写真)



準々決勝
三木 (富士ゼロックス本社) C- 西田 (富士ゼロックス大阪)
▲中断からの再開後に三木が鋭いコテを決めて先制。その後、西田が場外に出てしまい反則が宣告される。そこからの再開直後に三木が再びコテを打ち込んだ(写真)



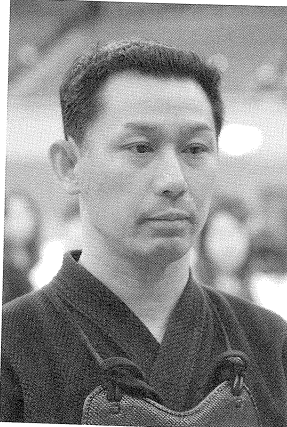
準々決勝
松崎 (東京システム運輸) ツ- 高橋 (日通商事)
▲高橋がメン技で何度か攻め込む。延長に入ると松崎が素早いコテで盛り返していく。最後は松崎の諸手ツギが相手の出ばなに決まった



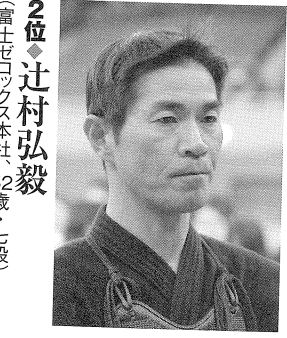
68歳(2名)の選手も出場した五段以下の部は、東海大菅生高校から国際武道大学で学んだ松崎(東京システム運輸)が、3度目の出場にて頂点に立った。松崎の前年の成績はベスト8。今回は準々決勝の長期戦をツギで制して前回は上回るベスト4にコマを進める。準決勝は、前回覇者の三木(富士ゼロックス本社)に対して、時間内にドウを決めて一本勝ちを収めた。決勝では、56歳の斉木(キリンビール)と対戦。3年前に3位になっている斉木は今回、優勝経験を持つ唐土(NEC三田)からみごとなメンを奪って初の決勝進出を果たした。決勝でも見せ場を大いに作った斉木だったが、最後は松崎がメンを決め、うれしい初優勝。「信じられません。決勝という舞台は慣れていないので、普段通りにやろうと言いついて聞かせて戦いました」(松崎)

高壮年五段以下の部

多彩な技を
決めた松崎が
初優勝



優勝◆鬼塚信行
(富士ゼロックス大阪、42歳・七段)



決勝
鬼塚(富士ゼロックス大阪) M- 辻村(富士ゼロックス本社)
▲序盤、鬼塚が相手の竹刀を制してから跳び込みメンを決める。辻村がその後は果敢に攻め立てたが、終盤は鬼塚も惜しい技を見せるなど反撃し、そのまま鬼塚が勝利を収めた(写真は両者の攻防、右が鬼塚)



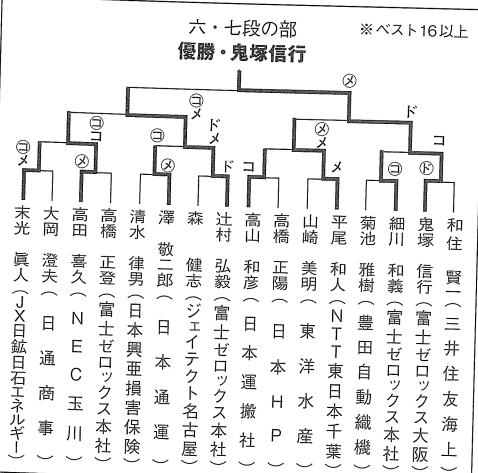
準々決勝
鬼塚(富士ゼロックス大阪) C- 細川(富士ゼロックス本社)
▲延長にもつれる長期戦となったが、何度か惜しいメン技を放っていた鬼塚が、最後はもつれ合いそうになったところいき気味のコテを打ち込んだ(写真)



準々決勝
辻村(富士ゼロックス本社) D- 澤(日本通運)
▲跳び込みコテを決められた辻村が猛然と技を打ち込み、終盤、ついに返しドウを一本とする。最後は延長の末、辻村がごとな跳び込みメンを決めた(写真)



準々決勝
高田(NEC玉川) C- 末光(JX日鉱日石エネルギー)
▲序盤に高田がゴテを決める。末光はメンの連続技で挽回を図るも、機会を探っていた高田は再びコテを打ち込み(写真)二本勝ちを収めた



388人もの登録があった六・七段の部。最大で10試合を勝たなければいけないという過酷なレースである。前回優勝の川崎(東洋水産)前々回覇者の宮本(三井住友海上)がともに2戦目で敗れ、混戦模様となった戦いを制したのは、太成高校から亜細亜大学を経て富士ゼロックス大阪に勤務する鬼塚であった。決勝戦は、この部門で2位を2度経験している辻村(富士ゼロックス本社)から一本勝ちを収め、3回目の出場にして初優勝を果たした。9試合を戦った鬼塚は、「疲れたの一言です(笑)。去年はコート決勝で、おとしはそのひとつ前で負けていたので、今年はおとしひとつ上に行こう、という気持ちで臨みました」と試合後に語っていた。辻村は、平成13年には五段以下の部で優勝をしている。2部門制覇は惜しくもならなかった。